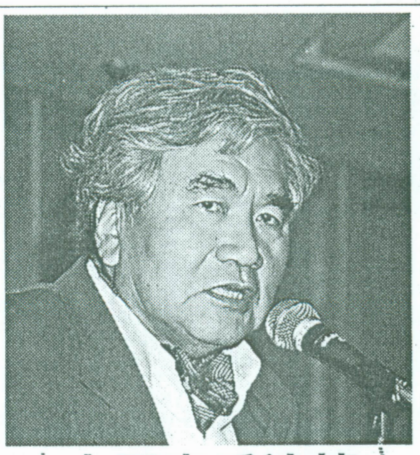
小田実氏追悼



本質的に小説家だった

柴田翔

小田実に初めて会ったのは、たぶん一九六八年だった。夜の十時すぎに高橋和巳から電話が掛かってきて、代々木の喫茶店に真継伸彦、小田実と一緒にいるから、出てきませんか、と言った。

高橋、真継とは既に一応の面識があったが、親しかった訳ではない。しかし別に断る理由もなかった。私の住んでいた本郷から、タクシーで三十分と掛からぬ距離だった。

当時の喫茶店はどこも照明がひどく暗かったが、狭い店内に入って彼らを探すと、奥の低いソファに寄り掛かった大男がそのぼんやりとした暗さの中から、構えたところのない笑顔を初対面のこちらへ向けていた。

「私たちで同人誌を出そうと言ってるんですが、柴田クンも一緒にやりませんか?」

大男はいきなりそんな意味のことを、ざっくばらんだがどこか折り目正しさを隠した言い方で、言った。「柴田クン」の「クン」は、初対面の年下を上から見下ろした言い方ではなく、いわば明治初期の書生たちが新しく発明した、心を許した同輩たちを呼ぶための「クン」だった。

こうして、やがて七〇年三月から三年間十二冊、筑摩書房から出ることになる季刊同人誌『人間として』が始まった。のちに開高健も加わった。

「この同人の間では、何でも三分間で話がつく」

何かの折り小田は嬉しそうにそう言っていたが、事実もそれに近かった。気質的にはばらばらだったが、文壇からは（開高健を除いては）距離があり、歴史と政治の動きに無関心では（開高も含めて）決していなかったが、世界と歴史のすべてを一挙に説明できると主張する東側のイデオロギーには、みな一致して深い不信感を持っていた。

それを、私たちはみな小説家だった、と言い代えてもいいのかも知れない。小田実は疑いなく、市民運動にまったく新しい方法と視野を開いた人物として歴史に刻まれるだろうが、彼もまた本質的に小説家だった。彼の市民運動のベースには、彼の小説があった。

人々の営みを理屈で切り分けず、愚直に、具体的に見きわめること――それが小説作法の基本だろうが、彼の市民的政治活動の基礎にも同じ態度があった。

彼の小説の登場人物たちのではなく、地を這い回るしかない虫の目でみること――小説家らしいそうした態度が、彼の政治活動を普通の人々に共感可能なものにしていた。

彼はさまざまな小説を数多く書いた。それらに共通する方法を今、無理を承知で一言で言えば、それは人間の暮らしの実相、今風の表現で言えば〈人間のリアル〉に密着することだった。それを大阪庶民の現実感覚だと言ってもいいのだが、ただそれは彼生来のものではなく、本質的に高度な知識人であった彼が、意識的に選び取ったものだった。

彼の小説の登場人物たちに七転八倒、無様に生きるが、最後の最後でどこから何やら倫理的な声が聞こえてきて、彼らを非人間的転落から押し止める。

あの倫理的な声は人間の〈リアル〉から生まれてくるというよりは、むしろ作者の知的要請、倫理的願望からきているのではないかね。

いつか二人だけのとき、本人にそういう意味のことを言ってみた。本人はひどく不機嫌に一言、「見解の相違や」と言い捨てて、黙り込んだ。

そのむっつり顔が、ひどく懐かしい。（しばた・しょう氏＝作家）

七月三〇日、小田実さんは入院中の東京の病院で死去した。この日、東京では激しく雷が鳴った。関西の新聞に「西雷東駱」というコラムを連載していた小田さんだったが、東の雷神も彼の死を悼んでいるかに思えて、私は続く稲光を長い間見つめ続けていた。世間的には、東京のベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）の運動は、小田さんと私とのコンビでもっていたと言われたことがあったが、実際には、ベ平連の運動でも、あるいはその後のいろいろな反戦の行動などでも、私たちはよく対立し、激しい議論もした。彼の意見が通る場合のほうが多かったが、時には私が断固として拒否した場合もあった。まったく違う性格や経歴だったから、それは仕方がなかったのだが、でも、その背景には、お互いの長所や短所を承知しあった上での信頼が出来ていたのだと思う。

運動家としても稀有な存在

吉川勇一

そうは言っても、振り返ってみて、私の代わりになるような人は周囲にいくらでもいた。私より若い世代で、私よりもはるかにすぐれた資質や能力を持った人物はずいぶん出てきた。しかし、小田さんに代わりうる人物はついに現われることはなかった。鶴見俊輔さんは、小田さんの葬儀のとき、「黒船到着以来の日本の一五〇年の中で、ジョン万次郎と肩を並べる大きな人」だったと言われた。実際、社会運動の面に限っても、小田さんが、運動家としても稀有な存在だったということは、いくら強調しても過ぎることはない。反戦にせよ、非武装にせよ、弱者の権利にせよ、彼の主張し、論ずることは、いつも骨太に事態の本質を大きく捉え、根本において外れたことは一度もなかった。それらを公に論ずる作家や評論家は多くいる。しかし、小田さんのように、情熱を込めて天下国家、人類の未来を論じながら、言説の域に留まらず、運動の修羅場の中にいて、有名無名を問わず多くの人びとともに行動に参加し続けた人は多くはない。たとえば、イラク反戦の運動のなかで、これまでの小田さんに見合うような活動を続けている人を、私は見つけることが出来ない。彼が一九六六年に提唱した「被害者→加害者→被害者」の論は、戦後の日本の反戦運動が日本の加害者性を自覚し、それを運動の課題の一つに大きく据えるようになった点で、重要な歴史的意味を持つ。だが、そうした思想的貢献のほかに、運動の最先端の現場に常に身をおいて続けた行動のスタイルは、人びとに大きな影響を与えた。今、社会の中堅にあって生活する人びとの中に、小田さんから受けた影響が、その後の人生の道筋を決め、生きる指針となっていると振り返る人は実に多い。彼の死後、「彼の華々しい活躍も結局、空回りだったのでは」と評する意見を目にした（『東京新聞』7月31日の記事の中のむのたけじさんの評）。私には同意できない。マスコミは「華々しい」面だけしか報道しないが、そこに現われない彼の影響力に気がつけないのは、皮相的な印象の論だと言わざるを得ない。小田さんは、千の風どころか、数万の人びとの胸の中に長く生きて、影響力を持ち続けることだろうと私は確信する。

（よしかわ・ゆういち氏＝「市民の意見30の会」・東京、元「ベ平連」事務局長）

小田実氏（おだ・まこと＝作家・評論家）7月30日午前2時5分、胃がんのため東京都内の病院で死去した。75歳。

氏は1932年6月2日大阪で生まれ、東京大学文学部卒業後、フルブライト留学生としてハーバード大学へ留学。この体験と欧州・アジア旅行をまとめた「何でも見てやろう」（61年）がベストセラーとなる。65年、ベトナム戦争に反対してベ平連を結成、その後も市民の側からの発言を続け憲法を守る「九条の会」の呼びかけ人に。著書に「HIROSHIMA」（ロータス賞受賞）「小田実評論撰」全3巻他多数。

図書館

私がはじめて図書館に就職した1950年代半ばの頃の「児童室」には、翻訳児童文学といえば「少年少女世界名作全集」或いは「幼年世界文学全集」と言うような文学全集がありました。

その後次第に創作児童文学が出版されるようになり、また公共図書館でも1960年代に入って子どもへの図書館サービスが重視される中で、子どもの本の「質」が問われ始めます。つまりそれまでに出版されていた文学全集の殆どが、「抄訳」